



近江の古瓦 XV 補遺 3

(湖南・大津)

「近江の古瓦 XV」では、大津市を含む湖南地方出土の古瓦のうち、さきに「文化財教室シリーズ」各号で紹介したものを除き、最近の出土瓦について述べましょう。なお、高島郡今津町日置前廃寺については「文化財教室シリーズ98」で軒丸瓦が出土したことだけを述べておきましたが、その瓦についても紹介します。

「文化財教室シリーズ82」で述べましたように、当時大津市の穴太廃寺についてはまだ調査が終了していなかったため、その出土古瓦の紹介は後日を期しておきました。今日、寺院跡の調査も一応終了しましたので、ここにその概要を述べることに致します。穴太廃寺に関しては、既に「文化財教室シリーズ75」で紹介されています。したがって、寺院跡の大要はこれに譲り、出土瓦についてその全容を紹介します。しかし、理解に便するため、まず2、3の点についてその概要を見ておきましょう。穴太廃寺は大津市穴太2丁目にある寺院跡で、国道161号線バイパス建設に伴う事前調査でその全容が明らかになりました。寺院跡の遺構が重複しており、上部に検出された遺構が穴太廃寺の再建寺院跡で、同じ場所に重なってその直下に検出された遺構が、同寺の創建当時の遺構と見られています。その伽藍配置の方位は、創建寺院と考えられるものが古い同地の地割に従っており、再建寺院はその中軸線をほぼ南北にとっていて、大津宮の地割と同一の地割のようです。伽藍配置の形式は、再建寺院が法起寺式（正面から向って右が塔、左が金堂で、講堂がその後方にある形式）であるのに対し、創建寺院は川

原寺式（塔と西金堂が向かい合い、その後方に中金堂がある形式。穴太廃寺では中金堂は検出されていない）ではないかと考えられています。このように同じ場所に重複して寺院跡が発見されていますので、この地出土の瓦がこの重複した寺院のいずれのものであるかを決定するのが、此処の出土瓦の研究では大切なこととなります。

此処の出土瓦は、素弁系軒丸瓦が5種類、複弁系軒丸瓦が2種類、計7種類の軒丸瓦と、榿先瓦が1種類、それに素文方形軒平瓦が2種類、重弧文の軒平瓦が2種類、計4種類の軒平瓦が出土しています。なお、鷗尾の破片も出土しました。これらの瓦の説明に加えて、へら書きの紀年銘の瓦がありますので、そのことについても言い添えたいと思います。

まず軒丸瓦ですが、特に注目すべきものとして、古い形式の素弁8葉の軒丸瓦が発見されました。これは「文化財教室シリーズ75」でも述べられているように、京都の北野廃寺や幡枝瓦窯等に類例を見ることのできる飛鳥時代末期の瓦です。外縁が極めて狭く、中房も小さいため、弁長が長くなり、弁の中央には稜線があります。蓮子は中房の中心に1個あるだけです(1)。これが寺院遺構のどの部分とどのように関連するのかは、この寺院の性格を決定するうえで重要な問題点となります。次に、同じ素弁8葉の瓦ですが、崇福寺や南滋賀廃寺、坂本廃寺など、この寺院の周辺でも類例が見られる瓦があります。これには、外縁が素文縁、疎な輻線文縁、密な輻線文縁の3種類が見られます。いずれも弁の中央には稜線が通っています。素文縁のものは

蓮子が1+6と少なく(2)、輻線文縁のものは、それが疎なものも密なものも総て蓮子が1+8です(3、4)。同じく素弁系で弁中央に稜線のあるものですが、弁数は6と推測され、弁の形が「かぶら」に似たものがあります。このような弁の形のものは南滋賀廃寺出土瓦にも見られます。間弁が左右にのびて内区をとりまく円圈のように繋がっており、外縁は細い平縁です。この瓦の特徴は中房の部分にあります。中房には、蓮子の代りに中房一杯に素弁6葉が作られています。このような中房のものは殆んど類例がなく、非常に特殊な瓦だと言うべきでしょう(5)。

複弁系の軒丸瓦には、弁中の子葉の間に界線のある普通の複弁8葉の瓦のほかに、弁中の子葉の間に界線が無く、二つの子葉がくっついていてのものがあります。普通の複弁8葉のものは、川原寺式とよばれているもので、蓮子が1+4+8で、外縁には鋸歯文が施されています(6)。界線のない瓦の蓮子は1+8で、外縁は鋸歯文縁ですが、前者に比して密に作られています(7)。

中房の中央に一孔のある極先瓦は、素弁8葉で粗い輻線文縁の瓦の系統のもので、中房の孔の周囲には小さな珠文の列が作られています(8)。

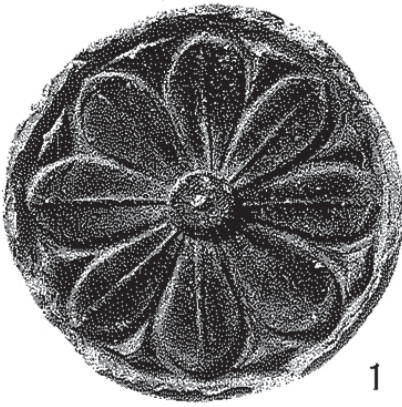
軒平瓦のうち、方形素文軒平瓦は南滋賀廃寺と此処だけに見られる極めて特殊な軒平瓦です(9)。ところが、此処では方形軒平瓦の平瓦部前半の裏面に、南滋賀廃寺の方形軒先筒瓦に見られる特殊蓮華文(俗称さそり文)が描かれた軒平瓦があります。写真の10はこの軒平瓦の裏面にある蓮華文の写真です。この瓦については不明の点が多く、今後の検討に待つべきものです。なお、南滋賀廃寺ではこの方形軒平瓦が、「さそり瓦」と俗称されている方形軒先筒瓦と対をなしていますが、穴太廃寺では、この軒平瓦はあっても軒先筒瓦は発見されておりません。重弧文の軒平瓦には四重弧文の瓦と(11)、三重弧文の瓦があ

ります(12)。このような重弧文の違いが、軒丸瓦のどれと対応するのかは、今後の報告を待たねばなりません。以上当寺院跡出土の軒先瓦についてその概要を述べましたが、これらに加えて、参考までに方形平瓦の完形品の表裏両面を示しましょう(13、14)。

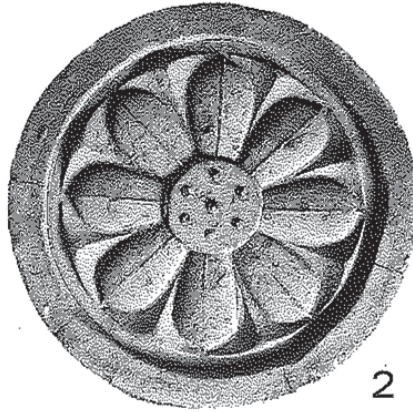
此の寺院跡の出土瓦の中には「庚寅年」及び「壬辰年六月」と、この瓦の製作年月と思われる干支をへら書きした瓦が出土しています(15、16)。この干支については、庚寅年を630年(舒明2年)、690年(持統4年)のいずれと見るか、壬辰年を632年、692年のどちらとするかが、穴太廃寺の歴史を考えるうえで重要な問題を提起することになります。即ち、瓦の作られた年がその寺院の建てられた年と関連するとして、寺院跡に2寺院の遺構があり、出土瓦にも飛鳥時代から白鳳時代までである事実とどのように結びつけるかということです。「文化財教室シリーズ75」でも述べられているように、2寺院の遺構を創建寺院、再建寺院とし、古い形式の瓦を創建寺院と結び、それに庚寅年や壬辰年を考えることは、それなりの意味はあります。しかし、同じく「文化財教室シリーズ75」の中で、前述のように確言できない要素のあることを述べているとおり、上述のように結論付けるにはなお反論の余地もあるようで、このことについては今後いろいろと研究されることでしょう。

此の寺院の大棟は、棟端を鷓尾で飾っていたようで、鷓尾の破片が出土しました。写真はその破片により復元したものです(17)。

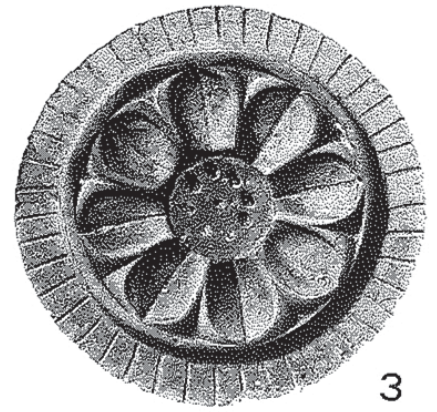
穴太廃寺から南西に約600m離れた弥生町の遺跡で、平安時代の軒丸瓦が発見されました。半分以上欠けており、中房部分は剝落が大きいので蓮子等の状態は不明です。内区は単弁8葉と推測され、弁は方形の輪郭の中に扁平な方形の子葉を入れたもので、間弁は先のとがった細く短い線で表現されています。この内区を取り囲むように、間弁に対応して



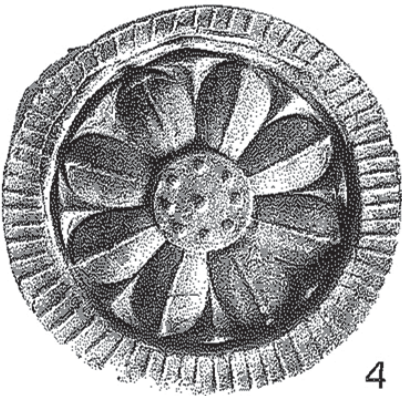
1



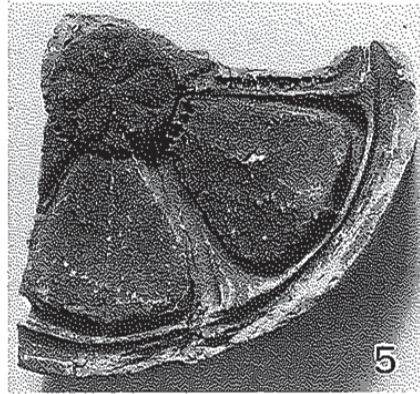
2



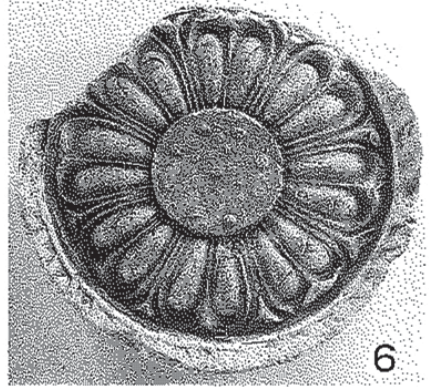
3



4



5



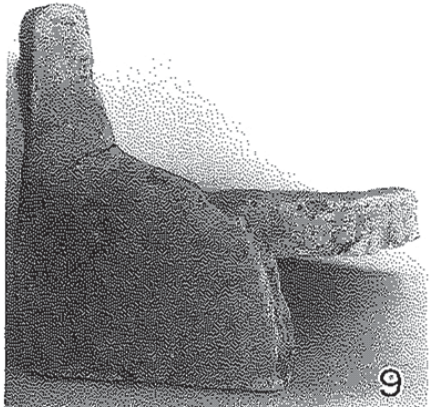
6



7



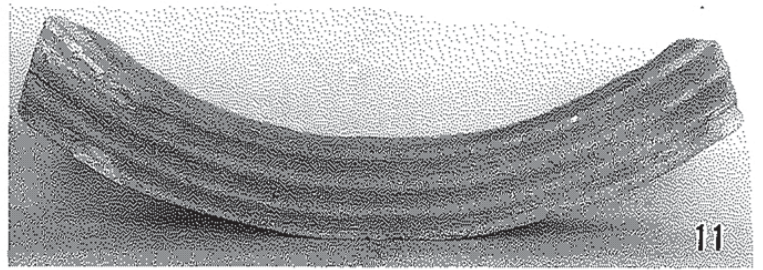
8



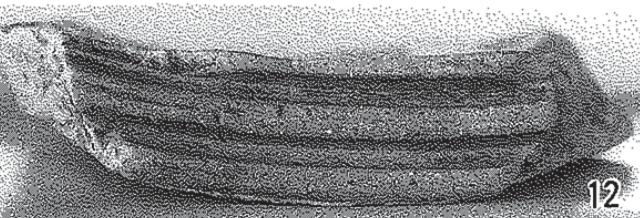
9



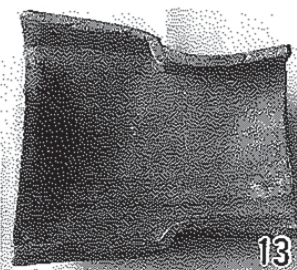
10



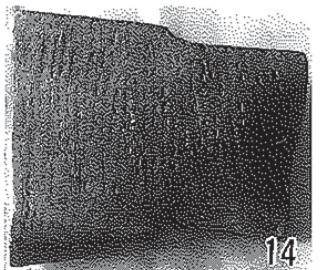
11



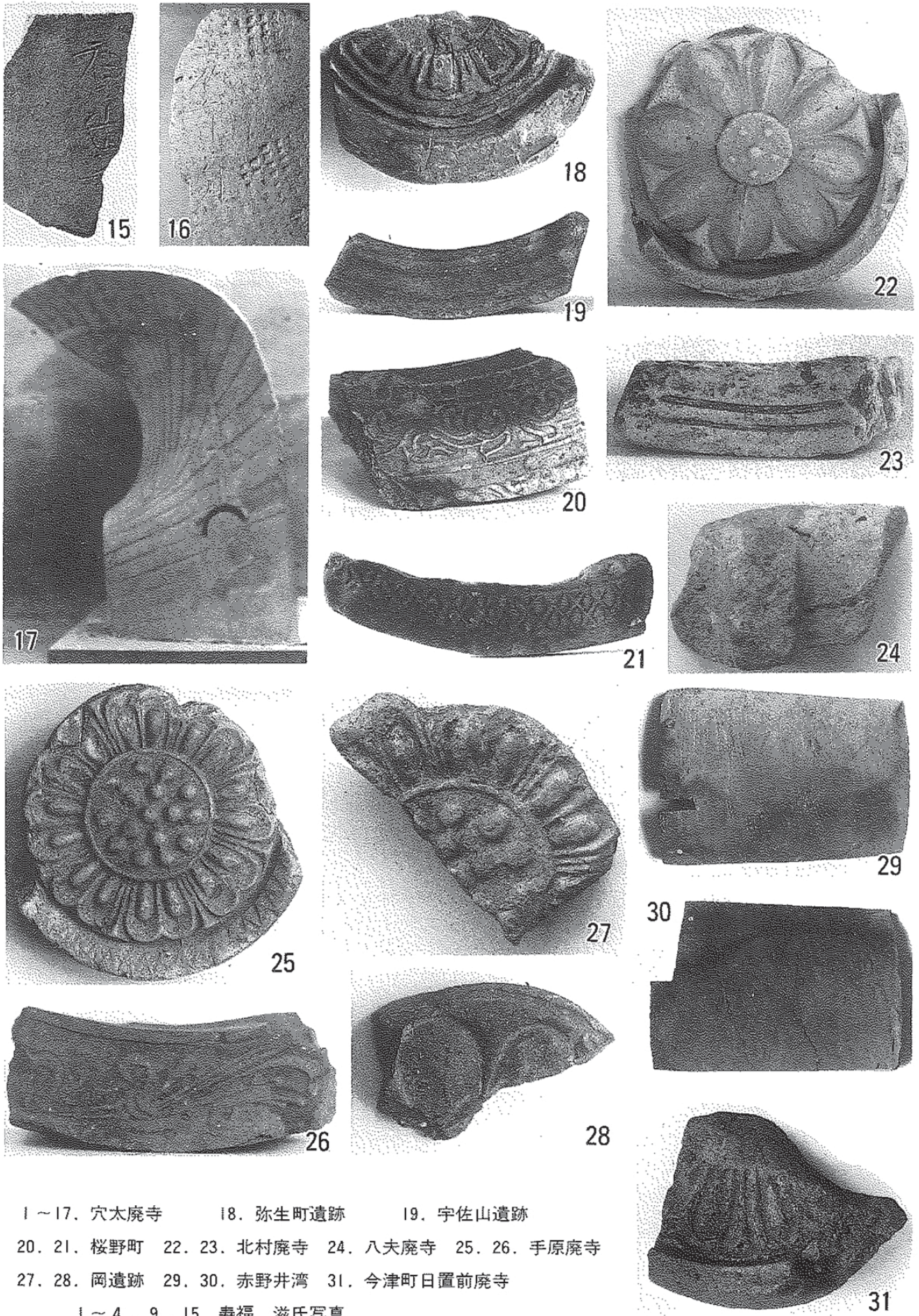
12



13



14



1~17. 穴太廃寺 18. 弥生町遺跡 19. 宇佐山遺跡
 20. 21. 桜野町 22. 23. 北村廃寺 24. 八夫廃寺 25. 26. 手原廃寺
 27. 28. 岡遺跡 29. 30. 赤野井湾 31. 今津町日置前廃寺
 1~4. 9. 15. 寿福 滋氏写真

小さな突起をもつ円圈が囲み、さらにその外側に1本の圈線があります。縁は幅の広い平縁です(18)。この瓦と同形の瓦が京都で出土しています。なお、この遺跡の性格については、寺院跡とは確定できず、あるいは「延喜式」に記載のある、穴太の地にあった北陸道の穴太駅に関連した遺構ではないかとの意見もあります。

平安時代の瓦が多く出土する錦織地域では、最近の宅地造成等の際の事前調査で3個の軒平瓦が発見されました。一は近江神宮の南西宇佐八幡宮への登り口に近い柳川畔で発見されたもので、瓦当の文様が2本の線だけの単純なものです(19)。これは嘗て崇福寺跡で出土したものに似ております。他の2個は桜野町の県道沿いの地で発見された瓦で、京都に類似のものが出土しています。一つは複線唐草文の中央部分の破片です(20)。このような複線唐草文の軒平瓦は、これまでも此のあたりで発見されました。他は瓦当面に斜線で全面に菱形を作り、その中に1個ずつ縦の楕円粒を入れています(21)。これは大津市では初めての出土文様です。弥生町のものと言ひ、桜野町のものと言ひ、いずれも京都と密接な関係のある瓦が大津市のこのあたりに出土するという事は、平安時代における此の地と京都との関係を知るうえで非常に重要なことです。「文化財教室シリーズ90」でも触れたように、大津と京都との関係は、瓦を通して突っ込んだ考察をする必要があるようです。

野洲郡野洲町北村で、道路工事の事前調査中に、此の地に古代寺院の存在を示す古瓦が出土しました。軒丸瓦は素弁8葉で、弁に稜線があり、蓮子は1+5の瓦です(22)。このような素弁8葉の瓦は県内数ヶ所で見られ、白鳳時代の瓦でしょう。これに対する軒平瓦は三重弧文の瓦です(23)。同じ野洲郡の中主町八夫で鷗尾の破片が発見されました(24)。他に平瓦片も少量ありましたが、軒先の文様のある瓦は発見されていません。しかし、鷗

尾の破片があるところから、白鳳時代の寺院の存在が考えられるのではないのでしょうか。この調査は小範囲だったので、遺構その他この遺跡の詳細な知見は今後待たねばなりません。

栗太郡栗東町岡では、栗太郡衙の跡ではないかと思われる遺跡が発見され注目を集めました。この遺跡では少量の瓦が発見されていますが、その中に軒丸瓦の破片が2個あり、共に白鳳時代のものです。これらの瓦の発見の状況から考えて、瓦葺の建物が郡衙遺構の中にあつたと見るよりは、郡衙以前にこの地にあつた建物の遺物がたまたま残っていたとの推測が強いです。ただし、この瓦を使用した建物が郡衙遺構の一部にあつたとの推察もないわけではありません。このような問題は今後の研究に待つとして、ここではこの軒丸瓦について考えてみましょう。

この瓦は同町手原廃寺出土の瓦と密接な関係があるようです。手原廃寺の瓦については「文化財教室シリーズ95」で紹介しましたが、その後さらに同遺跡地付近の調査が行なわれ、新しい瓦の発見もありました。その中で注意すべき軒丸瓦と軒平瓦を1個ずつ紹介しておきましょう。軒丸瓦は複弁8葉の所謂川原寺式とよばれているもので、外縁部の一部を欠いています。ほぼ完形のもので、中房には1+5+10の蓮子がありますが、その中に范の欠損のためか連結された状態のものがあります。これは後述の岡出土瓦にも見られ、両者が同范であることを示しています(25)。もう1個は軒平瓦で、所謂法隆寺式とよばれる均整忍冬唐草文の瓦です。この類似品は前稿で紹介しましたが、これは瓦の焼きなどでやや異なるようです(26)。

岡出土の軒丸瓦2個のうち、複弁8葉のものは一部の破片ですが、中房の残存部に蓮子が連結した状態のものが見られ、これが前述の手原廃寺の瓦と同范であることを示しています(27)。他の1個は素弁の瓦のごく一部の

破片ですが、これも手原廃寺に同似のものが
あります。弁の中央に稜線があり、間弁が比
較的大きなものです(28)。このように手原廃
寺と密接な関係をもつ遺構の存在が考えられ
ることは注目すべきことです。

守山市赤野井湾の湖岸に近い湖底で多くの
丸瓦や平瓦の完形品が発見されました。その
瓦の観察から、これらの瓦は未使用のものとの
見方が強いようです。しかも出土の状況から、
幾つかにまとめて縄か何かでくくられて
いたものと推測され、舟に積んで運ぶ途中に
湖中に落ちたのではなかろうかとの説もあり
ました。しかし、発見の場所が現在は湖底で
すが、当ても湖底であったとは確言できな
いようです。したがって、此処にこのように瓦
が大量に存在する理由については、なお多く
の検討を要する問題を含んでいて、早急に結
論を出すことはできないでしょう。いずれに
しても未使用の大量の瓦が湖底から発見され
たのは珍しいことです。さらに、若し舟から
湖中に落としたのなら、この瓦はどこで焼い
てどこへ運ぶものであったのかの問題もあり
ます。この瓦にはその存在とは別に、瓦自体
にも問題があります。それはこの瓦の中に、
端部がコの字形やL字形に切り込まれている
瓦が相当量あることです。写真でその一例を
示しましたが(29、30)、これは最初からこの
ような切り込みを作って焼いているようで、
他に例を見ないことです。このように、いろ
いろな問題を含んだ瓦であると言えます。

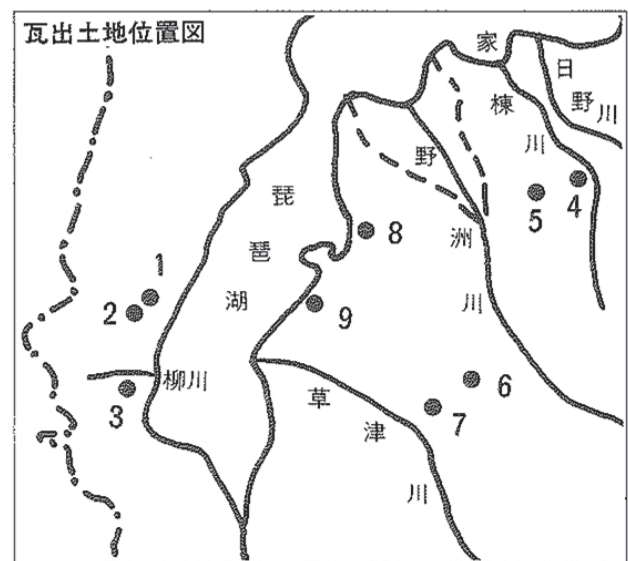
草津市志那の湖岸でも、湖底から瓦の破片
が発見されました。ただしこの志那の瓦は総
て使用されていたものです。したがって、此
処でこのように瓦が発見されたのは、この近
くに瓦の示す時代の寺院が存在したことが推
測されます。赤野井湾のものも、志那のもの
も、その瓦の示す時代は白鳳時代か奈良時代
と見るべきでしょう。

前述の如く「文化財教室シリーズ98」で高
島郡今津町日置前の廃寺跡で、最近軒丸瓦が

発見されたことを述べましたが、その瓦の写
真を示し、その概要を紹介しておきましょう。
この廃寺は「文化財教室シリーズ18」では今
津町酒波の名で触れたもので、その時には行
基葺の丸瓦が発見されていて、遺跡地の林の
中には土壇らしいものがありました。最近同
町で遺跡の分布調査を行なっていますが、そ
の際このような軒丸瓦が発見され、この土壇
が廃寺の遺構の一部であることもほぼ確実と
なりました。瓦は複弁8葉と推測されるもの
の一部の破片です。中房部分は殆んど欠落し
ていますので蓮子等は不明です。縁はやや高
い平縁です。不明の点が多いので正確には言
えませんが、奈良時代の瓦と思われます(31)。

以上で15回にわたって滋賀県下出土の平安
時代以前の軒先瓦について、その瓦当文様を
中心に述べました。県下における古代瓦の出
土例は、全国的に見ても屈指の数を示してい
ます。そうして、現在もなお各地で種々の調
査が行なわれていますので、今後新しい発見
もあると思われますが、一応これで「近江の
古瓦」の紹介を終わらしましょう。

(西田 弘氏 提供)



- | | | |
|---------|----------|---------|
| 1. 穴太廃寺 | 2. 弥生町遺跡 | 3. 錦織遺跡 |
| 4. 北村廃寺 | 5. 八夫廃寺 | 6. 手原廃寺 |
| 7. 岡遺跡 | 8. 赤野井湾 | 9. 志那湖岸 |